医学フォーラム

＜学生派遣事業報告＞

国際学会に参加して

京都府立医科大学　第4学年　松　本　承　大

私はもともと研究や実験に興味があったこともあり八木田先生が教授をされておられる統合生理学教室に学部2年生の時から今現在の4年生までの2年間通わせていただき，プロジェクトの一部ではありますが実験をさせて頂いておりました．

今回そのプロジェクトの成果をSRBR（Society for Research on Biological Rhythms），国際学会で発表するということになり，八木田先生および小池先生とともにアメリカ合衆国モンタナ州で開催される学会に参加する機会を得ることができました．これまで2年間，自分が実験して得られたデータがどのように世界に発信され，世界中の研究者達がどのようなリアクションをし，どのようなポイントが重要だと考えているのか，世界の研究者の生の声を聞けるまたとないチャンスです．しかも，ちょうど基礎配属の期間であり通常講義がなかったということも幸運でした．国際学会だけでなく国内の学会にすら出たことのなかった私にとって初の学会であり，とても貴重な経験ができましたのでその体験記を，いまの自分の感性や視点で書かせていただきました．

SRBRは全4日間の日程で行われ，1日は朝の様々なテーマに分かれたシンポジウムから始まり，続いてスライドセッション，午後からは再びシンポジウムがあり，そして夜からはポスターセッションという流れになっていました．ここで使われる言語はもちろん全て英語で，ロビーや待合室など様々なところでディスカッションを繰り広げられている光景に，私自身英語が不得意であることもあり大変圧倒され完全に委縮してしまいました．

英語の準備をもちろん全くしていかなかった訳ではありませんが付け焼刃感はどうしても拭えず，実際コミュニケーションを取るとなると大変な努力が必要であり言語の壁を強く感じました．研究の場において英語ができないと意思疎通ができないこと以上に，自分がやってきたことを知ってもらうことやディスカッションを通じて様々な考え方を取り入れることができずに独りよがりになってしまう恐れがあり，時間に比較的余裕のある学生の間に英語でのコミュニケーション能力を身につけることの大切さを痛感しました．ただ，八木田先生が海外の方たちと堂々と楽しそうにお話しされているのを傍で見聞きし，コミュニケーションの神髄は単に英語のうまい下手だけではないということも感じました．つまり，英語の習得と，「話すべき内容」の両立があって初めて研究者コミュニティーに参加できるのだということが分かりました．

この学会には日本からだけでなく，海外におられる方たちを含めて多くの日本人の研究者が参加しておられました．皆がみんなというわけではありませんが，八木田先生を含む何人かの先生方はシンポジウムやスライドセッションで大勢のオーディエンスの前で司会や発表をこなされていました．皆さんが決して物怖じすることなく謙虚ではありながらも堂々とトークをし，質疑応答にも答えられている様子を見て本当に感激すると同時に完全に委縮しきっている自分の不甲斐なさに物凄く落ち込みました．

学会初日，緊張の余り八木田先生の後ろを付

いて回ることしかできず，先生が世界中の研究者とディスカッションをしているのを側で聞くことしかできませんでした．研究者の方たちに自分から話かけることや自分1人で行動するなど想像もできない状況でした．

二日目も初日と同じように時間が過ぎていたところ，その夜に初めて様々なバックグラウンドをもつ人達とお話をさせて頂く機会を八木田先生や小池先生に作っていただくことができました．アメリカからの研究者はもちろんのこと，インドやアルゼンチンやブラジル，ニュージーランドなどなど本当に色々な国の研究者が来ており，私はずっと日本育ちのため大変拙い英語ではありましたが，身振り手振りを加えなんとかコミュニケーションを図ることができました．その中に，テキサス大学 Southwestern（UTSW）メディカルセンターの MD,Ph.D コースに在籍中の医学生とも話をする機会がありました．UTSW は全米の医学部の中でも上位に位置する難関医学部の一つで，研究大学でもあるため，医学部生の 10～20％が MD.PhD. コースに進むそうです．自分と同じような立場の医学生と出会い，アメリカの医学部のことを身近に感じた瞬間でした．

これを機に，先生が用意してくれたレールに乗っかるだけで自分からは何一つ自発的に動けていない現状に，このままでは何のためにせっかくアメリカの学会にまで来たのか，何も自分のためにならないのではないかと八木田先生とお話をし，次の日からは先生の後ろを付いて回るだけの行動をやめ委縮せずに自分から積極的に行動を起こしていこうと考えました．

しかしやはり私自身が英語が得意ではなく，ネイティブの人達とばかり行動するのには少々無理があったため，日本からきた研究者やアメリカにいる日本の研究者の人達を中心にお話をさせてもらうことにしました．

3日目から4日目にかけて様々なバックグラウンド，つまりは医学部出身の人はもちろんのこと，医学部だけでなく薬学部や理学部，農学部のこの分野で日本を代表する人達とお話をさせてもらえる機会がありました．みなさん共通して大変視野が広く，視点もまたとても高い位置にあることに気が付かされ，自分のことだけしか考えていないような方はほとんどおられず，また価値観や考え方，また自身への問題意識の高さなどを痛感しました．今自分が所属している単科大学医学部の中にいるだけでは決して触れることのできなかった多種多様な研究に対する考え方や価値観に初めは正直，大変困惑してしまいました．

今までの自分が知らず知らずのうちに，いかに

写真1　学会場周辺の景色．6月中旬にもかかわらず雪景色

写真2　学会の合間に訪れた会場近くのイエローストーン国立公園（左端が筆者）.

狭い視野で物事を考えていて，非常に偏った考え方をしていたのだということに気づかされ目が覚める思いがしました.

また色々な大学の教授やPIの方たちだけでなく，私と比較的年齢の近い助教の人達や博士過程の大学院生の人達とも交流をもたせてもらい様々なお話をさせていただきましたがやはり皆自分とは異なった価値観や研究への考え方を持っておられ，ディスカッションを重ねるうちに私自身が小さくまとまろう，楽な方へと進もうと無意識の内に考えてしまっていたのかを痛烈に感じました.

研究に関しても，今まで2年間実験してきて，その実験一つ一つに対して自分でプロトコルの意味を考えながら取り組み失敗すればその原因を考え綺麗なデータが出たら喜んだりしていました．それはそれで充実感はあったのですが，今回の経験を通して，それだけでは非常に視野が狭く，「何のために，どこに向かって研究しているのか」という俯瞰した視点で研究全体をとらえることの大切さを学びました．これまでは，せっかく実験して得た結果にも突っ込んだことをあまり深く考えることができていなかった，というよりも気が付けていなかったことに対して本当に悔しい思いがこみ上げてきました．これからは，そういった考え方を身につけることにも注力していきたいと感じました．何より，先生方が何から何まで私のためにレールを敷いてくれて当たり前だという考え方が心の片隅にあったことが今回の経験で分かり，自分自身で動き考え自分でチャンスをつかんでくることの重要さを非常に強く感じました.

この国際学会を通じて，日本を代表するような研究者だけでなく海外のとても有名な研究者ともお話をさせていただいたことによって，様々な考え方や価値観，研究内容に直に触れ，なにかこれまでの自分にはなかった幅広い視野や価値観に触れることができました．これは，百聞は一見に如かず，経験しないと決して意識することができなかった気持ちの変化でした．世界が広がる気持ちの晴れやかさと同時に，問題意識も強く持つことが非常に大切なのだと切に感じました．今回，学部生でありながらも私を国際学会に連れて行ってくださった八木田先生も，学部学生時代に国際学会に参加して楽しかったと言っておられました．そんな「良い経験の連鎖」が府立医大の伝統を作り，このような対話こそが教育だと言う先生の気持ちを少し理解できたような，そんなアメリカ国際学会参加体験でした.